

マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉 (在ロンドン)

緑の会議室

「さよなら、さよなら、さよなら」の名作で愛された映画評論家・淀川長治さんが亡くなったのは昨年十一月。「広告批評」の別冊である本書は、晩年の未発表ロングインタビュー、対談、珍しい歌舞伎案内などを集めたメモリアル出版で、あの独特の語り口がたっぷり楽しめます。「緑の会議室」のメンバーが「偉大なる凡庸 淀川批評の秘密」に迫りました。(マドラ出版、1000円)



淀川長治の遺言

こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。

はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。

ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

淀川長治の遺言

橋爪 淀川さんは、やはり語りの人ですね。活字の向こうに喜怒哀楽を重ねた人間がいて、映画はそんな人間を正面から受け止めようとする芸術なんだ、という熱気を帯びた語りが基調になっている。

広瀬 昨年十一月に亡くなったあと、英国の新聞に大きな追悼記事が出たのが印象に残っています。今世紀の日本のきわめて希有な例外的な人物でありながら、かつ、この時代のこの社会にしか生まれ得なかった人だったと思います。

橋爪 例外であることを恐れない強靱さ、といったものがありますね。映画に魅かれる情熱が、自分だけの例外的なある意味で特権的な「ここ」で、しかしそれを臆せず、その情熱を

偉大なる凡庸 支えた 異能の語りと解説力

と。思う。しかし、凡庸だからこそ偉大だったという気がします。

鈴木光司著 「バースデイ」(角川書店、2月2日刊)のイメージ

CGアート 横尾忠則



『多重人格探偵サイコ』(大塚英志原作、田島昭宇画、角川コミックス・エース)は、多重人格の刑事が主人公のサイコ・サスペンス漫画で、少年誌としては刺激的な描写が贅否を呼ぶ問題作です。

スニーカー文庫でも出しているが、それを読んだ神奈川県の森順子さんは、「この小説をスニーカー文庫ではない別の文庫から出版すれば、ある意味で

談話室から

凡庸なミステリーもどきではない」と著者があとがきで書いている。スニーカー文庫について中学生あたりが読むのかわからないと嫌かも」

戸の事件を連想させるという理由で、放送を拒否されたそうです。「ほかの分野ではありふれた表現なのに、なぜ漫画とその周辺にだけタブーがあるのか?」著者は問題提起します。親の側に見れば、なかなか難しい問題でしょうが……。

小林 淀川長治の批評はマンネリだ。すべての映画にながままにさされている」という批評を読んだことがあります。しかし、何か

く理解しないとダメですが、その通りだと思います。ではなぜ、凡庸な批評が求められ、成功したのか。まず、映画が大衆的な芸術であるということが大

きい。映画は、それを観たすべての人びとのものであって、文学のように正しい読み方とか批評というものが成り立ちにくい

を批評しようとする場合、少なくともいっただんは「さすがに」に「さなければ、その作品の意図は読みとれないのではないのでしょうか。

橋爪 教養のある人にもない人にも、一瞬にして理解してもらわなければならないのが映画。本質を掴む、単刀直入に表現する、余計なことを切り捨てる、といった戦略(芸)があったのだと思います。それはサイエンス精神であると同時に、大衆科学的なもの見方。大正の時代精神を感じてしまいます。

広瀬 そうですね。解説された中身はなんの不思議もケレンも、特権的な視点や分析道具もない。しかし、本書を読むと、映画の重要なシーンは、どんなに「瞬間のちよつとした点でも見逃さずに押さえている。その眼力と、解説能力の異能ぶりは、巻末の「歌舞伎案内」で改めて印象的です。思えば、歌舞伎も大衆芸術だという点では映画と共通するんですね。

橋爪 無声映画のよつと、すでに観客は過去のものとして見られているものさや、昨日の

このように生き活きと話す淀川さんが、歌舞伎を語りのなかで現代に蘇らせています。

橋爪 米朝さんも淀川さんも関西出身ですが、そのあたりは関係ありますか。

小林 関西人と言っても、米朝さんは姫路、淀川さんは神戸で、どちらも昔で言う播州にあたる。播州弁は、大阪弁の美しさとは対極的です。だから米朝さんは、苦勞を重ねてあのようになつた。そうしたコンプレックスの強さが、播州人を歌舞伎や映画にいつたきりきりしたものにむけさせるのではないかと

橋爪 なるほど。最後にもうひとつ、編集の妙を指摘したい。語りの手をまとめることに対する執念、編集のカンと技術がある。淀川さんの語りをほごよく盛りつけて、まさに『遺言』というにふさわしい特集にまとめてくれました。

来週は「青の会議室」日野啓三選エッセイ集

魂の光景

(集英社)です。

マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉(在ロンドン)

緑の会議室

グリム童話が今、なぜか人気です。「白雪姫」など、以前からおなじみであったはずの童話の「初版バージョン」が意外に残酷でシニカルであることが知られるにつれて、かつて若い読者の関心を呼び、グリムを解説した本や大人向けのアレンジ本までが大ベストセラーになっています。そのブームの根底にあるものは何か? 「緑の会議室」の議論は白熱しました。(白水社、2000円)



こぼやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

ベスト・セレクション 初版グリム童話集

広瀬 √グリム童話のこと、は、ごく一部の有名な話を、子供向けに薄めた形のものしか知らなかったのだということがよく分かりました。『初版』は骨太で、直截で、こめられていて力が違うといった印象です。

橋爪 √高橋吉文さんの『グリム童話 冥府への旅』(白水社)によると、ナポレオンに蹂躪されたドイツは、領邦に分かれ言語が統一されていないことが弱点だった。そこで、共通言語を確立しなければならぬという政治的意図で、この童話が編纂されたそうです。改めてグリム兄弟の仕事の巨大さを思い知りました。

小林 √中世の三十年戦争で徹底的な虐殺が行われた中部ドイツのグリム童話について、の、時ならぬブームになったのでは。どんな正統な権威(学校や企業や有名人や両親)にも必ず「裏」があった、自分の抑圧した欲望と同型の動機によって動いていると、このことを信じているかと思えます。

広瀬 √ドイツの世界では、表面的な人間関係の配慮が予定調和的な幸せを約束してくれる。でも、そこからみ出していく情動も、自分の中で否定したい。生の欲動や情動を肯定できる世界がグリム童話の世界といえるでしょうか。

橋爪 √「精神がバランスをとるため、そういった方向に突き動かされるのだと思う。ドイツと初版グリムという二項対立は、現代を面断しているのかもしれない。

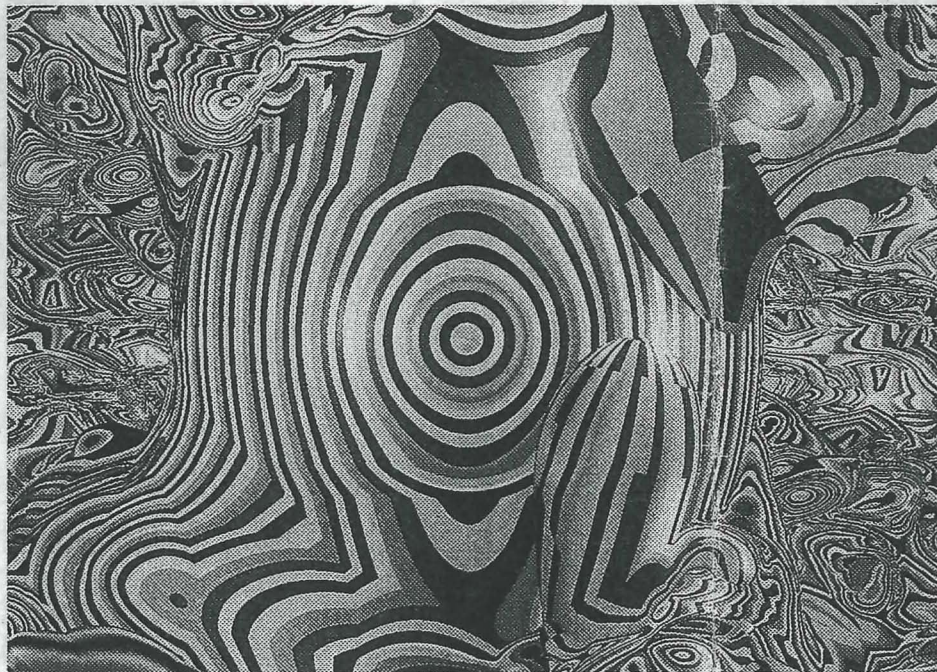
小林 √「シンデレラ(灰かぶり)」「ヘンゼルとグレーテル」「白雪姫」など正統派と思われていた童話の『初版』の残酷さは際だっています。文学作品としては、残酷部分を覆い隠した後(第七版グリムより、

こちらのほうが価値は高い。橋爪 √高橋吉文さんの『グリム童話 冥府への旅』(白水社)によると、ナポレオンに蹂躪されたドイツは、領邦に分かれ言語が統一されていないことが弱点だった。そこで、共通言語を確立しなければならぬという政治的意図で、この童話が編纂されたそうです。改めてグリム兄弟の仕事の巨大さを思い知りました。

橋爪 √日本のグリム童話の読まれ方は、「子供らしい夢をほぐす」といった都市中流階級の好みに沿ったものだと思います。その偽善性をひっぺがそうという、悪意に似た子供世代的思いが蓄積して、本当のグリム童話について、の、時ならぬブームになったのでは。どんな正統な権威(学校や企業や有名人や両親)にも必ず「裏」があった、自分の抑圧した欲望と同型の動機によって動いていると、このことを信じているかと思えます。

橋爪 √「精神がバランスをとるため、そういった方向に突き動かされるのだと思う。ドイツと初版グリムという二項対立は、現代を面断しているのかもしれない。

橋爪 √「精神がバランスをとるため、そういった方向に突き動かされるのだと思う。ドイツと初版グリムという二項対立は、現代を面断しているのかもしれない。



品川嘉也著
「意識と脳」(紀伊国屋書店)のイメージ
CGアート・河口洋一郎

オリジナルの残酷さ 正統の偽善ひっぺがす

小林 √ただ、ここ数年の子供の世界のベストセラーには、また別の一面もあるような気がします。我が家の娘(小五)の読書履歴は、『学校の怪談』『常光徹著、講談社』『金田一少年の事件簿』(金成陽三郎原作、さとうふみや画、講談社コミック)

橋爪 √「精神がバランスをとるため、そういった方向に突き動かされるのだと思う。ドイツと初版グリムという二項対立は、現代を面断しているのかもしれない。

前回に会議で取り上げた『瓦解』(戸野本優子著、情報センター出版局)について、兵庫県の福田富子さんが感想を送ってくれました。

とか、いろいろ言われます。私自身も、総合職を志望したり、

女性にとって働きやすい環境作り、行政も企業も、そして、個々人も、もっと真剣に取り組んでいってほしいものです。

来週は「青の会議室」

メッセージ
するデザイン

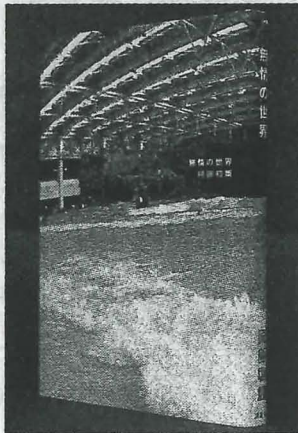
(ジェラルド・キャロン著
主婦の友社)です。

読書マルチ

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉(在ロンドン)

緑の会議室

「シブヤ系文学」あるいは「J文学」と称される純文学の新鋭・阿部和重さんの最新作品集。思うように周囲の世界にアクセスできない若者たちの屈折した内面、ふとしたことから起る暴力の連鎖を乾いた笑いで包み、一筋縄ではいかない読後感を与えます。「緑の会議室」では、若い読者に共感を呼ぶこの世界との断絶感、崩壊感のありように議論が集中しました。(講談社、1400円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

無情の世界

阿部 和重著

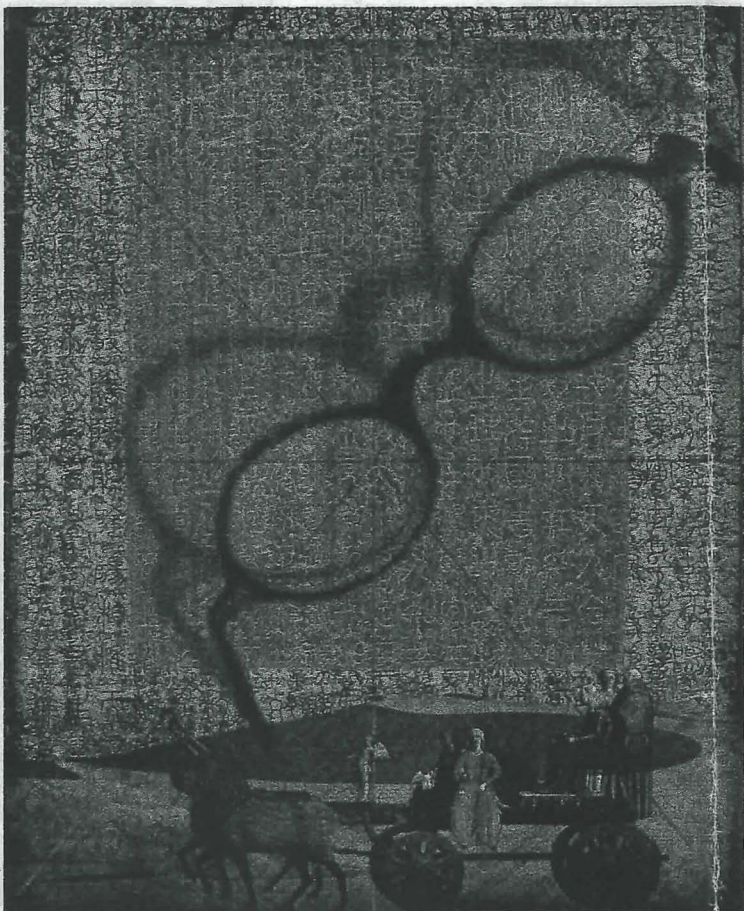
小林 √一見、書き流すような文体に見えても、細部まで神経と計算が行き届いている。阿部さんの作品は若者の風俗のみで「新しい」と見られがちですが、テーマや構成のぶれのない、小説のまとめ方のあざやかさは、本格の作家と呼ぶべきでしょう。

破滅への連鎖見つめる 醒めた嗟いと孤絶感

「中島敦全集」(筑摩書房のイメージ) C.G.アート・浅野 信二

広瀬 √崩壊感の漂う世界を描きながら、それを他人事のように外側から見ているようなドライさも感じさせます。
小林 √その崩壊感がきわめてキレイに描かれる。資質的には筒井康隆さんに近い。ともに映画から多大な影響を受けたからかなあ。ただ、やはり阿部さんの方が醒めていますね。

「中島敦全集」(筑摩書房のイメージ) C.G.アート・浅野 信二



「無情の世界」では、小学生の家庭教師が、ストーカーのように女性をつけ回す。「無情の世界」では、主人公の少年が、公園に裸の女性を盗み見に行く。「無情の世界」では、男が妻の不倫の現場を押しさそうと、自宅の様子を隠しカメラで盗み見ている。
小林 √「塵」のラストには新しさを感ずりました。ひとつの笑劇(ファルス)的な事件が、より大きな破滅的な事件につながってゆくという予告で小説は幕を閉じる。現代において、卑小な笑劇が人類をまきこむカタストロフィにつながる可能性が、これほど実感をもって提示されたのは初めてでは。
橋爪 √覗く行為がさらに別の人間に覗かれていくように、この種の事件も連鎖し、伝染するということ予言なのでしょう。
小林 √ある女子短大で講義した時に感じたのが、まさにこの小説を読んでいるような感覚でした。個人的に話せば、決して感情が欠落しているわけではない。にもかかわらず、集団としてみると何かオバケと対峙しているように思っていました。手続きも少年ドラマシリーズで『タイムトラベラー』を知って以来、時間を行き来する物語が大好きです。このページは信じられると思えました。
インターネットを始めたあかつきには、ぜひ、談話室を見たと届いています。

「初めまして。この談話室の記事を切り抜いて、何度も本屋さんに行きました」と、茨城県の相澤賀寿子さんから、うれしい書き込みが。

インターネットの談話室では、少し前に、「人生もつ一度」という時間テーマの小説について

談話室から

「スキップ」(新潮社)などの北村薫作品はもう読んでいたが、お勧めの本はどれも

インターネットを始めたあかつきには、ぜひ、談話室を見たと届いています。

ほんの一冊

来週は「青の会議室」
＝朝日新聞社)です。

マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉(在ロンドン)

緑の会議室

女性や子供までもが気軽にジュウジュウと楽しみ、今や日本人の「国民食」となった感のある「焼肉」。だれもが朝鮮半島生まれだと思っていたこの食べ物は、実は戦後、日本で発明されたものだった。焼肉やホルモン焼を何より愛する学者が、日本の「焼肉史」を徹底的な取材で解明。意外な庶民グルメ文化の発掘に、「緑の会議室」メンバーも思わず舌鼓を…。(太田出版、1600円)

日本焼肉物語

宮塚 利雄著



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

広瀬 √大衆的な食べ物であるだけに、むしろ記録が少なく、調べるのが大変だったろうと思いますが、よく取材して、「焼肉は日本オリジナル」というルーツを解き明かしています。

橋爪 √明治になってからお肉を食ったのは、手づかみで、なかなか内臓までは手が出ない。しかし戦後、焼肉という形で、内臓料理が定着していくさまを、資料や聞き取りで追いかける。戦後社会の側面史というべきです。

小林 √かつて韓国を訪れたおり、土地のおばあさんが「昔はこんな肉ばかり食べる料理はなかったよ」と言っているのを聞き、貧しさのゆえかと思いましたが、「焼肉」という料理自体が

おいしい料理を素材に 戦後庶民史掘り起こす

勝谷誠彦著

「いつか旅するひとへ」(潮出版社)のイメージ CGアート 奥村鞆正

肉料理と別系統だという指摘は重要なポイントです。しかし、なんとなくの論証がうすい。焼いたあとタレをつけるのが日比にプルコギを食わされて住生

本焼肉で、焼く前に味をつけるのが朝鮮(韓国)風というところですが…。

小林 √プルコギはジンギスカン鍋で作るすき焼き(牛肉焼

したことがあります。日本で言う焼肉は、向こうでは「カルビ焼」のようです。それにしても、80年代までは、日本では焼肉とかホルモン料理には独特のあやしさがあつたような気がします。

橋爪 √私は子供のころ、東京の下町にいましたが、「××銀座」みたいな商店街のあちこちに「ホルモン」のぼりがはためき、おいしそうではあるけれど、子供が近づける場所ではないという印象でした。その当時に比べると、焼肉はほんとうに垢抜けした。こういう庶民史を掘り起こしている点で、功績が大きい。

小林 √その通りだと思えます。昔の朝鮮料理の看板は黄色と黒で書かれていた。こういう描写はなんでもないものですが、こうやって記録されないと確実に忘れ去られるでしょう。

広瀬 √戦前にあつた高級朝鮮料理屋「明月館」のメニュー、戦後の食糧難が生んだ「ホルモ(モツ)焼」、朝鮮半島の南北イデオロギー対立が「焼肉」という中立的な呼称を生んだという意外な事実、八八年ソウルオリンピック以後、焼肉店や韓国料理店が日本で増加したことなど、それぞれに興味深い話題が登場します。ただ、このサイトの本にはちょっと入りきらな

い素材を、とりあえず盛りつけたという印象もあります。

橋爪 √もう少し(焼肉のタレのように)素材を寝かせて時間をかければよかったのにと思われま

広瀬 √家庭料理としての焼肉は、エバラなどの「焼肉のタレ」の歴史に限定されているところがちょっと残念。家庭への広がりは、料理の大衆化や定着のうえでかなり大きな要素ではないかと思うのですが。

橋爪 √日本で肉食史の話題は、うっかりすると差別の話になってしまつてますが、この本はその辺を微妙に避けていますね。戦後の飢えをバネにしたとは言え、朝鮮・韓国の在日の人々が内臓料理や焼肉に市民権を獲得させた。食べてみれば安、おいしいという庶民の実感に支えられたわけです。

小林 √この本が、在日コリアンのみを中心に書かれていることには、ちょっと疑問がありました。

広瀬 √著者の「とにかくホルモ料理が大好き」という立場には、意識的な選択があつたのだなと思えます。在日コリアンの問題も、肉食と差別の問題も、いま現実には、多くの人が一般的な食べ物として焼肉を食べている、という事実を徹して語ることで、自ずと解消される面がある。批判はあり得ると思いますが、定着した庶民文化について語る方法として、こういう書き方もあっていいのではないのでしょうか。

(3月15日の電子会議を編集しました)

来週は「書の会議室」

メモ・エッセイ・ザ・ナイト

藤沢周著 河出書房新社)です。



五月から、読者参加型の新企画「この本が効く」がスタートします。日常、喜怒哀楽の繰り返しの中心を支えになった本、役に立った本、新たな視点を与えられた本……そんな本との出会いについて、読者の皆さんから体験を募り、それをまと

に本と人とのドラマを掘り起こしていきましょう。この本が効く。〇〇な時、この本が効く。〇〇の内容はそのつど設定していく予定ですが、まず最初に次の四つを募集します。▼激しい恋に落ちた時▼向学心に燃えた時▼重心に帰りたい時▼別

の自分を発見したい時。さあ、そんな時には、どんな本がおすすめですか。投稿は電子メール、はがき、封書、ファクス、いずれでも構いませんが、具体的な書名が分かる書き方をしてください。投票の際は、必ず名前と住所、連

絡先の電話番号を明記してください。紙面採用分にはテレホンカード(千円)を差し上げます。また、「〇〇な時」のテーマ〇〇を募集します。「こんな時に読んだから」と、この本が効いた」という体験がありましたら、ぜひお知らせ下さい。

マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉(在ロンドン)

緑の会議室

写真家・伊島薫氏が、人気アイドルたちを死体に仕立て、凄惨な「殺人現場」を演出した異色のファッショ写真集。銃撃され、刃物で刺され、トランクに詰め込まれ、川に突き落とされ……様々な「死」を強要されるモデルたちは、しかしどこか楽しんでさえあります。「緑の会議室」は、こうした疑いの死をエンターテインメントとしてしまつ、現代人の希薄さに迫ります。(光琳社出版 3800円)

死体のある20の風景

伊島薫写真集



橋爪 √なんで「死体」の写真集なのかと思つたのですが、あくまでも死体の着るファッション(あるいはファッションに身を包んだ死体)の写真集なんです。ではなぜ死体のふりをしたモデルなのか。「死体」だからカメラ目線というものもないし、愛嬌をふりまいてもない。カメラマンにとって、モデルの不必要な意識を消し去るのは、かなりの技術なんですよ。が、なるほど相手が死体だと「純粹」な写真がとれる。それ

は誘惑がどうなと思つた。小林 √伊島氏によると、どのような死体になりたいかは、基本的にモデル本人の希望にそつたようです。見終わった後、ちょっと死体を演じたくなつた。たがそれはあくまで「演じる」であつて、その意味で「死」は感じさせなかった。遊びとしての「死」ですね。

広瀬 √ドラマなき時代を象徴する写真集ではないか。女優・アイドルと有名ブランドファッションという組み合わせに

殺人現場という設定を加えることによつて、ドラマは強烈なインパクトをもつ。そしてそのドラマの風景が素晴らしい「絵」になつていく。写されているファッションなど、そうやってはじめて現実感が付与される。橋爪 √美術の場合にはモデルが死体になりたがるなんていうことはない。アイドルたちが、「ふつうの写真なんかもういいよ」といつ、ちょっとエクセントリックな感覚が共有されているのかなと思つた。モデルたちは、本当は殺されてもいいし、犯人はいないし、死体でもない。撮影者もモデルも読者も、それを百も承知の上で、しかし敵かなものをとりまく儀式のように、この共犯関係的な状況を楽しんでいる。

小林 √そういう意味で、かなりの時代の気分を射抜いていると思つた。それもひよつとしたらカメラマンより、モデルの意識の方が先行している。伊



チャールズ・ダーウィン著
「種の起源」(東京書籍)のイメージ
CGアート・河口洋一郎

「図書館でセッセと新聞を予約して、家事と育児の合間に、これまたセッセと読んで」いるという大阪府の高原泉さんが、最近感動した本は、青木隆生著『閉鎖病棟』(新潮文庫)。

「『三たびの海峡』(同)で青木ファンになりました。『閉鎖病棟』は世間から強い偏見をもたれている精神病棟の患者たちをめぐるとのお話です。患者たちの中には、こんなにもピュアで一途な、澄んだ心をもつている

談話室から

人がいる。以前、曾野綾子さんの著書で、布教のために来日したキリスト教徒が、一生を異国の大学の地下室で、昼食用のジャガイモの皮を剥いて年を老い、それに満足しているという一文を読みましたが、それに似た感動を覚えました」

▼激しい恋に落ちた時▼向学心に燃えた時▼童心に帰りたい時▼別の自分を発見したい時▼そんな時はこの本が効く▼という意見を募集しています。電子メール、郵便、ファクスでお寄せ下さい。名前と住所、電話番号を明記して下さい。

ドラマなき時代ゆえの希薄な死への認識

の作品も、モデルの側の牽引力を感じさせるものが少なくないですね。「死体」を演じるというのは、単なる自己陶醉を通り抜けた先の、究極の自己陶醉といつて良いのかもしれない。橋爪 √三島由紀夫が自決する前に、いろいろ写真をとりましたね。腹切りもあったし、凛々しい姿もあった。死を明瞭

島氏の意図よりも、モデルたちの工夫をこらした死へのアプローチの方が印象的です。モデルたちが、この写真集の中ではひどく知的に思えました。広瀬 √伊島氏のアイデアを、一気に現実化したのは小泉今日子さんだったようです。他

こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

にイメージしていれば、生きている姿が写真に撮られるだけで、死とのギャップに興奮してしまつという力学が働く。逆に言えば、このモデルたち、読者たちは、死をありありと意識していないと言えないのではないか。橋爪 √なるほど、この写真集は、唐突な死という設定がほとんどで、現実感もないしそれほど切実なものでもない。「死」を扱っているに過ぎない。逆に言えば、そういう浅薄な「死」を鏡にして、「自分の生を映し出してみたい」と感じるほど、生の側も現実感のないものになってしまつていくのかもしれない。小林 √「太陽」の九二年九月号で「死を思え」と題して、欧米の死体の芸術写真の特集をしたことがあります。たとえば死んだ娘を着飾らせて母親が記念写真風にとりたつている。そこには極限の美と同時に、さまざまな恐怖がありました。この写真集にはその手の恐怖は微塵もない。この死に対する認識の甘さは、そのまま現代人の死に対する管理の完璧さ(必ずしも肯定ではなく)を表しているように思います。橋爪 √いま気がついたのですが、この写真集の死体はみな、まだ誰にも発見されていなく、いわば無垢な死体ばかりですね。私が思うに、いちばん死体らしい死体は、こつこつと劇的な文脈を奪われて、モルグ(死体置き場)でシートをかけられた死体なんだけれども、それは誰も演じたくなかつたらしい。(4月5日の電子会議を編集しました)